駿藝新話

義集

文庫
13
35

15
1205
2

15
1205
2

駿甚雑話巻二目録

義集

武運の稽古
天人相勝
鈴木某う歌
不收不求
秘事々睫
仁ハ心のいのち
浩然ろ氣
民々主者の天
善悪の報
爰ハ浮世
朝ゝ夕の花一時
春秋乃おもひそひ
佛よなるやう
義ハ心ハ
敬の工夫
富士のまち

日本紙書

天下の寶　風俗ハ政の田地

駿甚雜話卷二

武運の稽古

あるあ時わ武人ゝ武藝ハ場よりゆるさゝ小角の竜へ事ゝ例の文藝ハ及角ゝ角ゝ武藝ハ各の家業とゝ之ハ常ハ稽古あるべきもの但武藝とハ武運ハ一つきう市ゝ幸とおもひ給ふ角ハ武藝ハ武運ハ二ときるとおもひ給ふ長所ハいつゝ武藝ハ達ゝあるべかるとゝ武運ハ十ときゝ片ゝ位の論あるべき長所の合戦ハ武藝ハ物ハ鬼武藝とゝ武運ハ人物ハ鬼武藝ハ武運ハ武藝ハ武運ハ武藝ハ

所とも。各武藝の稽古わゝ。武運の稽古ゝ。さて
武藝の稽古ゝ。そもゝの師と同作ゝ。ゝ。武運の稽
古よりおくハ。藝術の所ゝ。そもゝハ。翁のとこ
そと。活ゝ。ゝ。ゝ。

行度萬古を作るとも一日のうち日月の食なほ遥遥上ハ空のかなる事をあらはし中ゝ推歩するよ分秒をもあやまらざるなり況や遠くるたいのなるまわれ爲さや天下九州を信といつゝ・・・ハ人をかのまゝ無ゝ為はらくさゝ爲ゝ仁ゝ信よ為ゝわれ・・・天心よ叶ふ也・天人よかなさゝ・なるゝゝ擁護なすゝ為ゝ為ゝ為ゝ仁を行ふ仏ゝ偽よ信をもちゝ・其驗わるゝきをゝ月わ為ゝ生に・・・わるゝまなわ常よ仁を為ゝ人をそゝ・なるゝ・雪に伝を驚ゝ・人と欺うをゝ・ゝ為ゝ・家月を・為ゝ月・芸誠天よりゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ月・実助もわるなんされ、戦場みゝもあの為ゝ

禍機よ觸をゝ・矢石をもわるなるゝ・前ゝの武運の稽古・・・

せ家滅ひて跡方もなく成行くそれ
程ふしあはせなる身を厚く晩成を保さること
くはく人さぞ等ハ皆武運の稽古なきゆへ
なるべし武門の稽古なるしるし移襲厭勝の力なり武運
ともなりて祈ふまし孔子も獲罪於
天無所禱也とこれの給ふ元神ともに佛ハ論ず符章陀
羅尼やうのものを信ずる婦女なるものハいうせん丈夫なる
者の有為ます中なるわ然ども近世士大夫なる上なる民
の所為なるハ惑ハさるなすなり是ハ道の民間に
ありて是なきもの沸騰をなすべく翁毛詩の贍烏爰止于誰

之屋とい或ハ吟ぜ慨嘆ぶおのれしらぬ事なるけん

善悪ハ報

善はなるべく悪中なるべく角ハ武運の稽古と
なるわ善き事なるべく感服し給ふ今ハ此稽古ハ
あるべきなり世ハ仁ハ伝ふる人ハ福あるもわり不
仁不信なる人ハ禍あるもわり顔回ハ大賢なるも貧窮なり
天し盗跖ハ大盗なるも富厚なるべし角の悪武運
の稽古もなるべく少し給ふ人ハ禍あるハ悪をすき人ハ福あ
なわく必定のものなるべく幸わるハ叶の仕合なく

不定なるゆへなり。聖人も多く正理を従作し給へり。愚人
まことはうく従作しき。あるとくハ分に病なく長命なりんと思ふ
て常に酒食をこのみ。ゆへに。養生するわゝ。是の氣よわゝ。自身
せんやいのはゝ。職事をよくしてよくなるとすれ。強く
養生をよくしても夭死をする人あり。養生わるくしても長命なる
人あり。さるまハとく養生しても益なし。養生せぬとくも害
なしとハいへども。なほ養生せざる人あり。不幸なく立身せざる人あり。
なほよくせんとくも幸なく立身する人あり。さるまハとくよく
奉公をくも益なし。なほよくせんとくも害なしとハいへども
なほ養生をくも益なしとハいへ。日夜酒食を恣にせば。

やがて病死をもとくし。奉公をくも益なしとハいへ。
職事に懈ハやがて黜罰せらるゝ。然ハ養生ハ長命を
るの道。奉公ハ立身をゆるの道なるハ。是不易の理といへ。
各よく考へく思ふべし。なほなほ思ひくもわきまへ。悟をさとり
治をんに。道理のおのく定まる方よきとも治をんやけの志
わハせのく定まらぬてよきとも治をんや。道理のおのく定まる
方よきハも治まるくなりもし。理ハ極めなるまハ。あるとも
いくも後悔なるべし。なほ
まらぬものなるまとかよるひとのわるまーあのひぬまハ必臍
を噬て。さるまハ禍悪やいまを。理のおのなる事なり。

聖人の教は君子の為にも道理のおもくきこゆる事上古の禍福
天人の事は別にそなはるなれども人の為にはいとゝ道理の中
なる事は福を得んとて善をなすにあらず禍をおそれて善をなすにあらず
善悪報ずるの理は孔子の人を教へ給ふ道理なり福善禍淫の
説は書に出たり商書に天道は福善禍淫とあり人たる
者は須らく天の命じ給ふ所を知て行ふべし
中庸に道理の至極なる事を述るに釈氏の方
便なりとやうの事ありこれ同日の談にあらざるべし

天人相勝

翁かつて云ひけれども人衆勝天天定勝人とは伍子胥呉
王闔閭をすゝめて楚国を攻入父兄の仇なるを以て舊君平王
の墓をあばきて尸を戮す伍子胥の両友申包胥秦王に
請ふて云ひけるは人力を以て天に勝ん事を望む
今の名言なり天は必人よりも邪を正に敵せず衆人
にして勢盛なる事は人力をもつて天に勝ん事を望む
なり天の性は定まりなる内の事なり天定まりて人
勝ちといふは但天を悠久なる自然なる物なる人の
分未だ及ばざる所なり急に其験を見ん事は人の小き眼
をもつて天道を窺ふ故なり毎日おこる事をもつて若悪に報なき
事と思へば君子は善をしても報なく小人は悪をし

てとゝ為とゝ為の若過てこゝろもとゝ
務とゝ為ものを考ゝ行ひなるゝ。そゝ
いとゝ定まらざるなるゝ。其後天の定まらざるゝ。顔回ハ一簞の
食一瓢の飲陋巷の窮居せしゝ。其名今ゝ日月と倶ゝ並
て朽ち載朽ちて朽ゝ。盗跖ハ聚徒千人天下ゝ横行せ
しゝ。其死して肉ゝ寒さるゝ名を万ひく。惟ゝ此を考
なゝ。善く遺臭百世して称ゝ。そゝ見
ゝ天の顔回ゝ報する事果して落ゝ。盗跖ゝ報する
事果して厚ゝ。そゝ顔回盗跖のゝ善悪乃
報おそきハ稀なゝ。其外世俗を思ゝ善悪の報応的なる

もゝ。又考ゝ。おそきもゝ。其外ゝ及ハ。
ゝ後国家賊吏多ゝ前後罪ゝ。そゝ
もゝ。おゝ考ゝ。又幸ゝ一生のゝ。死後
考ゝ。いゝ考ゝ。ハゝ邪縣の租税金穀
の出納年を積ゝ限なゝ稠畳ゝ。その交互紛糾の
銀の出入多ひゝ。大ゝ考ゝ。
さゝ。其ゝ。それゝ。惟ゝ考ゝ。
ゝ官財を私して妻子ゝ。者後ゝ
ゝ。その跡ゝ。惟ゝ考ゝ。
其内ゝ考ゝ。罪ゝ計ゝ。

えんをうれひて。と。及く己が智より自慢して。さらに懲戒なく
なりぬ。さきと不完をもてする事の。法を多のえんとやわる。一
旦ちうこうさるよ其場人々。紀同おうよけうあ。分錯も動
定よ漏らふとなを。智も計も施をやなく。その英利忽よわ
殺をまつ。さきに考ほうくのうとうんくも事れ高ことの
事わく。彼も元も終よハ免ら八出。考ほ八国家のよ事ハ
大きなる石事ハかてのとくまれ定実俄よハ考を雖きそうい。と
むや天と四海国を偏覆し。米億万ともなき人を以くいく
英大の事なり。およそ人のをれ中。善とあ悪となく限も
なく人孔子を八善悪れ報いうくを急ら極りきれ於後悔を

く。治定せぬ事れ中よ見れ行く。小人の険岌なく事
をもとむれやもわやもひくあ。ら人と天と終よハ嘉定
の極なる時わて。元と天定まるとしかまく。天の聰
明を。天下の名義の人とうをを及よ。若悪れ報恨
事大小すうもあうよわ。むうくよ行
くやまくもよ世の英雄豪傑ものハ己が武勇智謀よ誇
て。天のよく定まらさら戦見く。天を人力をもく自由
なるものとおとれたく。猛威を逞し。新力を恣にして。一旦
ハ志を得るよ似ることあるも。終に天定おとねをは。勢
天罰よわ亡く。身を滅ぼ家滅ぼ。古今歴々として。そ

の為にすべきなり。人として天を勝て、禍のもとを
去るべし。小人は眼前の利を見て、後のよろこびを
忘れ、お我の害を顧ず、ゆくゆくあるを懼る。詩に曰ク
すれば、畏天之威于時保之と。謹て此を思へ。
ゆくゆく幸なる。

愛欲なき世

あるべき世、葱嶺の教を信ぜざるべからず。
あるべし。いつる見合はゆくの人はいとひ、其前はまみえを儒
道のたとき事とさとるべし。
ゆるべし。此儒教を見ゆるは、ゆくゆく貴有の相は泥く世を拘

名利はうたたねの如く、一生過はかなく思はるゝ。
とは如夢如幻と見るべし。異端はとせず。佛性をさとり、本覚の
地に到る人も多し。吉凶外に縛のとく、苦を手踵を門に接るを
見るに、浮世の有様はすべて夢のごとくなり。いつくそこにとゞまる
一切の夢と見破るべし。そもそも道はとたゝく自然とよく、前聞は
なまじいの学問なり。其、もとをなまわるに、背を高明の
士の儒を逃れ、佛に帰する人、其如くこそ、きよきを
鄙しきとなるべし。たゞの事なり。或人、家に住る人、家に
富饗の設きあるに、其座中に一人あり。酒食に飽満してのち、さらに

うきまゝに、ひとすぢ果敢の腰を抱く、河原に路もなく、乞児の飢を食をもとむるなり。おのゝ〳〵彼れ身をかのらに、なかゝるくきやゝ、ゆゑとなき、とおうくゆるゝ、傍者世をあきなひ、名利を、とゝ〳〵、友〳〵頭陀つ教をきはゝくあるゝ、武人の酒食を飽くゝ、兄をゝ〳〵、ものむを、仏の名教中を、楽地あるを、をきらさるとハなり。丈夫天下を、真と妄とわれ、天理をあるハ、真と、人物をあるハ妄なるゝ、天地開きそめよりゝ、三綱五常のたゝり、て、古も今もこのゝ、ゝるゝ、ゝとハ、天道の、儒をゝ、ゝく、真なる地なり。ゝ〳〵、ゝゝ、ゝと、ゝ、彼とゝなるゝん。仏世の人〳〵、ゝくハ、富貴利達を謀ゝ、毀誉得喪を、拘ゝ、一生、東西ゝ、奔忙て、日夜、

る程を、怒を、住、怒を、なゝ、圖、強ゝるゝ、ゝゝ、ゝゝ、ゝるゝ、おとろふ、ゝ、ゝ、皆人、欲を、ゝ、ゝ、妄なゝるゝ、ゝゝ、ゝ、ゝ、ゝ、彼ゝ、ゝ、ゝ、孔子も、不義の、富貴を、見ゝ、ゝ、浮雲、ゝ、ゝるゝ、なゝき、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、釈氏、三世、ゝ、仏世を、行ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

てこそこの虚霊なるものを貴とはすれ。今淫と事とを二障と
きらく。三毒五常をとくすべし。けっしてわらはるものとなすべからず。
どう事真の心とすべき。実やこの神識の霊光なる処をこそ
て本性の真如とするかゆゑ。人人もこれ火の光明なるがゆゑに
火を物を照してこそ火とはいへ。山海をてらすは龍燈
山燈やこれ世ようしん火のことく。この光照らすものすべ
く沈める光のごとく。星遠く空月地を。
神火とてそなはっしと。ときに八佛法世を行ずるときこそよって後。五倫五
常をとなへるまでなり。ゆゑ〳〵動作する人おのゝ人事物理を真
ときこそ。ゆゑ〳〵霊覚なるこゝろ。月本八

推古よりおのゝ仏法ありしを後漢明帝よりおのゝ仏法わたるのごとき
のこゝろ。彼ゆゑこれのごときこゝろ。仏性をもせよ。本来をもせよ。
空界の妖怪といへども。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ゆゑ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
とて。父子を背く。君家遁世する人と世ようなへ。
きゝ〳〵おのゝ。真の道を入ねばとてこれをいへ。のゝ
やとおのゝ。きゝ〳〵男ひ給ふ。背の貫頭のゝ
長太郎。ものゝ。ものゝ。翁ものゝ。践祚なり。

鈴本集の歌

ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

父、一向に釈教を信仰せり。其子も儒を学ぶ。道の大義
を知らざる人と風聞す。其人の夢の世界、夢のうつつ、夢
ならずや。ときを同志の人よりて仏法を聞き、其ときと
もかくよろんけるやと問ひ給へば、但ときてわくよろんけるやと問ひ給へば、
ときは、ときく遠よりときあるとき、うつつ、よりて新くときて
そやとハよむなりとうつつ、わるくの徳なり。翁其ときを
いきくことけなるときハさやうのまよやくにたきるく。
そもくに向きくるなりてきき今あるハ山新分はときとよ
り海をきをるもしさきよ翁うつつるれ。夢のうつつ理ときくハ
ときとそのおとなり、城分よりときあるとハいひうる
く。そもくハおよて山道は大なるとくそ新よわるやまを分れ知な
ハ其親切なる事ハ仏ときるなり有へうしるとハ今時くに
備おるとも考て其人と、ひ、うつ、ある。新とのこのをやるを
ときくハ因て彼の考くさハ地ときと思ハ。霍去病の父と
名のるおひく、作ときの遺體なるまとときく後ハ其考くに
其ゆくにおよ百倍まも其人きもとの人なるまる。別人のやう
まの我ときんゆしる。有酒のうまきハ下戸も考まとる。上戸ハ考ハ
別のまなる。慈俗のうまさハ上戸も考まとも。下戸の考ハ別の
事なる。儒者も山道は真なりて實なる味を劉伶の酒の味を

さて何方の候の美を考るとて、銘々の身よりの所作のとて外物を極さま、実性よりまのあらるべき起るも元飛るも元動も元あるも元行住坐臥皆元なり。夷も元険わも元生も元死も元。吉凶禍福皆是なり。造次顛沛

ものとしてよくくを元とせざるなし。

翁、ゆるさるる孫八、寿を考る人より、終本某もあるべき反ぬるを問うらさとて、希命式をおくられ、分は考るやとハよの見分なるべ

銘のうちの花一時

十四　松永某と、終本氏の道学友あり。其人銘の中の歌とくうるアーの問うらよりわれ歌あり。又て終本氏のよやるとく。

とうく人の内わくあるべし。

あさうの花ときふとも郷ふるはよそうぬるもるる。

山歌を味ゆきやうるあるべ待る。昔のあさうとよるる歌あるべきとも、うる銘のうちのあるなる事をひく秋のあを

きとそ、世のうのなるべ考うする知向とする外ハ見人を白居易の松樹の年終元朽。槿花一日自為栄とうく詩を引の朗詠あとれて風雅とすることも元あるべ栄枯を知るのみ。

彭殤を齊くするとうく。俗耳ハ高きやうよきこゆとも、と

淡きうるなるしあるべ元ハ元僧ハ曇の涎を引。荘周の唾を

なるしるを思うるべ今松永氏の松ようそうぬるとうくるハとうくあ

いかなる人にても、若しくは、あるひは、道を聞き、夕べに死すとも可なりといへるごとく、男女ともに、命を惜しむ。ゆゑに、貧の天より来る性なれども、世に人あるを、貧を厭ふ。されども、己を忘れ、義のために、命を捨てし、義士、烈婦、孝子、貞女、節義、文情、忠臣、孝子、貞女、義士、烈婦、孝子、貞女、義士、烈婦、孝子、貞女、義士、烈婦

なく、さてあるべき限りは過ぎ去りぬ。死去の人々も過ぎあまりて
あくなるべきやうなれば、一月、さくは一月より過ぎ来りて死し、一月
、さて八月の過ぎ去りしより、さくは一年以内をもて
死去かりて八月の月の過ぎ去りぬ。絲毫の
遺念なし。こゝをもて、おのれ八月の末つかた、
已に定命まさに尽きなんとす。日のひを待惜くきゆ
き八月の恨のあるべきやうなんとおもふ。
書る天象をたしかに自らわきまへまほしく、
うさらぬ人のこゝろなるべし。
うはさよりくらうはよりくらうあるべし。前も共に詠よりはじめ。

天地のうけ一陽にして、咲くは春日むおさくの
花
おのれのみとは思はくやはやおさくはうさくと春むも愁
深を
てはるとはむとすれども、わさくのわがこゝろぬけとは
春の。
陽とは世作のつゝ兎唇も嘯もくさくの春なくて
おうくはなるべきやうは、前をすべくこゝに紙を終へう。
不枝不求
産中の人々の歌をたしかに、各はかく紙を死去けりしよ。

中よりそのこゝろやうをたかなそへたるとこゝろ毛詩の組
みくゝるこゝろをまちとあるそれやうよそこゝろ
翁問云おもきこゝろをたかなそへたるこゝろ
やむさるこゝろをあらはしたるこゝろ
なるこゝろをあらはしたるこゝろ
せをそこゝろあらはしたるこゝろ
いひたるこゝろ

婦人の作る詩なり其史役よりて久しくゆきかへりて
おのよそのこゝろの切なるをいひて
瞻彼月月悠〻我思道之云遠曷云能来一説云

いく度の月も〻月もきぬさきに月の仕業とうたがふこゝろ
をよ悠〻とは遠き義男女おもひわかるゝ路をきかなきに我
夫の帰らむ路もしらでいかゝ思ふとなり

百爾君子不知德行不淑不求何用不臧是を夫を告る
やうにいふなり相思ふ中なれば女は
なき私の情なりかはりておのこを使りてたゝ切のこゝろとなり
そをよ羈旅ハよの人を艱難なるこゝろ
ろの名節を損せらきぬやうあるこゝろ
君子なるこゝろ

つよいものをよわいものをあなどり衆をたのみて人をあなどる
てをおとさんとするこころ
わるくきとつよいものをかろんじ
うしてゆるしもとめてあるものを
貴して礼義をもつまるとつの
よわいものをあなどる
わるいものをよしとする人を
さるをハ孔子も子路の敬まるる
ひとをくるしめる
ハいやしき周室の婦人をさ

ハ先王の遺沢ハ
流ハ代代わるまでをたくきこの
よ行ハ聖賢の教わるやうにきこえ
場ハ大丈夫ハ名利の境ハ一生をくるしめ
きもとハ一旦空とときあとをとてハ
ひたすらハ世を厭人忘して分ハ活計とするのみなる
よりハ五倫の常をくるやうにハ一筋一本よりのきれ
わるいやうにハ杜氏のわたしをハ
ときハ人のまるくきすまわ
ばこのうちわんとするハ子路の

殘やまとうて。孤貂も温袍もなたはすうら忘まうらんとひ
とまるとあ人まハかゝよりしなるまゝ。このやうのまを詩よりよさゝ明朝は
人ゝ儒者の頭中ゝなゆ。すうゝ学ゝまうゝよなのんあるゝ公ハ
しも和歌ゝよあるゝも。京師和ゝ学ゝ名家なるゝ。翁のは歌をき
きゝハさゝ。ゝ学ゝ学ゝ。ゝ学ゝ。ゝ学ゝ。

今宮よりしうしくかくいふ義山の殺風景と議もわろくなきと
義ハ孔子のいふ山有木工則度之賓
有禮主則擇之やうなきハ西洛の時翁、さうあくけわ陸そひ
大津の宮の御宮より大織冠より佐々木の思ひも錦をさまる歌
きよ秋よりよりするし多し大体の思ひも錦をさまる歌
まをこきやとうまえ〳〵されと其後代々の歌人春よりする
〳〵わろくもなく淺緑花もおもしろきようをもむすとよる見秋夕
とふきこのひえんなるもわきハ右野の雪就田の錦を而仲
のるくるくさハ之と豔陽桃李の節よりとなのくさ

也ハ紅葉ハ作るよ花よりおもしろ但此きハ作ハ豫用服のそうなき
戯すよ作きハ作きハ優劣わるくもさてやうなし今をとも
て古の部と哉との樂を演するよ若冷と云く作る者孔子部を
ハ美おせて若尽くなきとの治ひ哉をハ美たく世を未尽若
との作ふ美ハ聲容の思ひなる哉ふ若を美の実なるやて
わきハ美ひなる世なるたとくハ部を春ハ花なるや哉ハ秋の紅葉なる
ア。なる紅葉ともたその思ひなきハ文を優劣なきのとく部哉とも
ア。その聲容の盛なるよの作ハなきとも冬春の陽和
なる美わきハ其思ひなきの中よりおのけうとのなる紅を合ち
ア紅葉ハ秋の風霜の中深なせ尽其思ひなきの内よりおのけうとを

さゆゝき氣とゆゝわア。新の樂ハ揖讓よりおるかゆゑ其の実
優くとして泰のかする方よ陽きとゆゝ。くく春の花の陽和ゆ
氣わるゝとゝ。其の樂ハ伝代わア。おるかゆゑ其の実慄くとして
嚴なるゝよ陽きとゆゝ。くく秋の和氣風霜の氣おるゝこと。
ハきまる聖徳とゝ。ひなのゝ。新とおくゝゆゝ。成も落き
よハおるゝ。新よ比すきハすゝ。落きかゝるゝ。ゝんそれ故よ新
ハ若たゝ成ハゝゝ。若たくさねなるゝ。きまハとくく春も秋も天
なアゝ。天の徳よ同異わアとゝ。ゝゝ。春も成も聖人なゝ。
聖人の徳よ同異わアとハゝ。ゝゝ。春も成も共の用ゝゝ。ねかとゝ。
新ハ冬の陽和の時ゝ。聖人の幸なゝ。成ハ冬ゝ。

風霜の時ゝ。聖人の不幸なゝ。されハ程子学を
偏ゝ。所遇之時然爾とゝ。ゝるゝ。わ程ゝ。けたくゝと始終
よくゝ。かゝるゝ。ハ徳ゝ。若ハ。ゝ。黒ゝ。ゝゝ。ゝゝ。
人ゝも徳ゝよ感ゝ。日ゝ徳新の若たゝ成ハ。ゝ。若たゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝ。月ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
花ゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
徳ゝ。わアゝ。ゝゝ。ゝゝ。若額をたきて謝なすね。

秘事ハ睫

さて法客ゝ。ゝゝ。我等書を讀くなゝ。ゝゝ。性命乃
徳の伝のゝ。ゝ。其道理と世法よ移くゝ。世法

八別段なるこのみやうよいと作くを得ぬるゝ。け程世の談よ
作ものなきまゝにきてわうるゝとゝ。ゝきも物ゝき
を味わるゝを見へ作る。徒よ般ゝ八睫ゝ。わゝちゝきは
ゝゝゝ見へゝのゝ。衰弱るゝ。氣そのゝ
ゝゝゝ孔子も舜の遺言を聞ゝ大和と称ゝ
さゝ八匏羹の言も聖人擇焉ゝゝむゝ孺子わゝて。
滄浪之水清可以濯我纓滄浪之水濁可以濯我足と
歌ひ給ひ欲のなき八定く聖人八不凝滯於物世と推遷る
のをゝく物ゝくもわゝ孔子きゝ孔子きゝ水すむ
ゝ人纓をわゝ濯ひ濁る人足をわらゝ。元縁をわゝ孔子ゝ

ゝくをわゝゝゝゝゝゝの月のゝ孔子の小子よくきけとの給
へゝゝ八柔厚褊褊ゝゝ藻ゝ生れ家ゝゝ抓くゝゝる
ゝ欲ゝくゝゝ作る者ゝ人とゝゝゝゝゝゝ
ゝくハゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ物の歌ゝくわたくきゝ作きゝ作
孔ゝ。前ゝゝゝ時京師ゝ。ゝゝ作ゝの老儒ゝゝゝ
きゝ。ゝ。ゝ作ゝ八。
東照宮御生世の時ゝ。ゝ。ゝ。

ろくゝうちまとと上意わすゝとなり。当世の人たゝ六月を
けけ分の程を考らけてをとをかよ。ゆたゝ。ゆたゝ。物たい
とゝ華麗をすきとすれば程よ。家ともち崩ゝ。さ義のとも。
く福厚ものゝ。そしむゝ。或諸侯の家老ゝ。ひとゝ。
万石ゝとの分おくわしゝ。其国おく登城の時。わうひ式木綿服織
をを考るゝ。路次おく。ゆくわゝ。ぬきる程よ。玄関の扉よう
けくゝ。ゝ。ゝ。其うを看打。考も。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
うゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

華麗をもとゝし數寄をすきすゝめ用をなをさまゝ
わ殘ぶ〻やうまねるものなし。古きくのうゑ上ハ大坂夏御陣より
將軍家惣陣を御延見の時、なを多作源ろハ泥惟子をもつて
胄をうゑまくを仕せらまゝとなりて又加賀の家臣より山崎長門
ちと、ひ〻名ゐき武功の者わゑ。後々祝髮をなく閑齋とそ申し
給真孫なるよしとをはゝ〻系金をもつゝ。軍ゆ大坂を陣の時ハ
せ〻ゆ地をく紙ゑ羽織ゑ流九のわゑをゆるわゑ〻わるを其家ゑ
義ゆらわ。元ゆをく其ゆ軍裝の將きまをゆゝ況や平日ハ麁
飲食家化ゆるゑ無英をたゝし。元用のゑ以金銀を費をゝ。な
けゝ〻きまなをゝ。古ゑゑ太平ハ樊ゑわるゝハひなゑゑ。ゆき

我改をゝて八民俗ゑ敷き國まゝ。ゆゑ非なるゝ。但其ゝ源
をゝゝを私欲ゑ引きゝて。上ゑ月をゝ。光れ行をゝ。ゑゑ起らるゝ。
東照宮をゝゑをかゝ〻四〻也ゝ。ゝ〻ゝ作わゝ。ゑゑ。但ゝ
の驕ゝゝゑ病ハ上下ともわゑゑ。ゆゝ。ゆゝ一刃の奉ゑ浪ゝ。
古ゑゑ。我國の財を將ゑ人自ゑゑ誘ゝ力を恃ゝ敵を慢るハ。
必國を失ひ身を滅をゝの例和漢ともわけゝ數ゑゑ。永祿
天正のゑゑゝ。ゝ。今川氏真武田勝頼ゑ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゑゝゑゝ。ゑ一見の強きゑゑゑ
故ゑ。國のゑゑ滅亡をゝ。ゑ。ゑ。ゑ

治乳の威光日は盛なるとき、さいの語を唱へんかすべ常
よりの身の程を考へ働わけしこゝ、寸を得ては王の寸尺を得ては王
の天下を治し、終は天下を治し、此の字七字は決して不
ふつてをてゆきれども有なれと是を唱へる事は修行の事にこゝ。

佛よりなるやう

唐中納言とて、是を聞くよりて身の程を考へ、わのことも
こゝろ道場をまひよりも要訣あるくい、身の程を考へ思ひ
わのまくる慢なる人のあれ、ゆまへ引さけ
く身の程をうんぬく全備するあるくいとこゝ、翁はよくうん
ぬき治へて、なる程さまくに治る事なくい、ある大

藩のうちよりの物の月利は長しこゝ、多くあるこゝ、或時は後のあるき
刀を見てくれ、別は正宗なりとて、中の孫よみせ殺まし
あるに、中の孫ふけうこゝ、是は志津と見へくい、中くい正宗
なくいとこゝ、やはり正宗なるて、沙よ祝ひあくなり。
よくく研くよりの中くも正宗なるは多数何よりも
此とおもふ程よりを得ふる義なきこゝ、取て表
よりの中くこゝは、研くみなよ、志津よ似る得を見
ゆきとも正宗と、是を、くく年始る程よ右のうち君
もこゝ世殺まこゝ、二代よりなるくく本の孫右の刀を持
系こゝ、治頼の刀はるこゝて正宗なるくい、今

文先君術月利の法よきよい法也と雖るくゆゆしく之尼
家花戸と其子細を問ひ給ひ不思議よ
子法門は後生たすかるべきかくこそ正宗なるやうくい日て給其
の家より易くお入いくしい老人おもひ常よ念誦打して
後生菩提祈ひしい。ある時おもく我ぞ此後生の
祈ひやうをく伝給ふ今とこの祈ひやうを知くあく
ゆくあのおもひ凡夫の分として俄よ佛よなの雖んと祈う
へハやくく佛よなりたきゆくきこの。佛よなの雖んとなりハ先よ
き人よなの雖ずくと祈うこの人よ義人よなるやうく後佛を
祈うくく伝なるよ命のとおもくしやく法ようと思ふくく。

見ゆ尼なるよりて知く彼刀もくく正宗ハ給よすんと刷
給よ爰く正宗よなりたきよおもくおもひんそきよりもいき志津
おりく見ゆやとあしゆく。志津の法とも伝給ふ
刷ハ尼やうく正宗ハ伝よ給よくくく知くと云しいく
ハくくきくくきおけ尼。今ハ多しうよ正宗よなるやうくい
とゆくとおの尼。正宗の法よハ月をけもして。其刀ハ
よ爰しく命ハ志津どんやして刷し給よ伝ゆる正宗よなるとも
給ハ地ゆるとと刷くおくし伝ゆ。其後さ
ゆ酒とゆ尼ハ在おく二人爰ハ先後と命うひよ辞退ゆる
よ。ゆとゆの口。爰士ハ年よおやうゆやうよハ爰と給り

ゑとゝのゝよ。其相ゝ八ゝ人ゝまゝちゝの年ゝもゝそゝなゝとゝわゝあゝまゝちゝう
ひゝはゝすゝ。ゆゝくゝわゝやゝうゝまゝわゝあゝき行ゝの年ゝをゝもゝくゝ行ゝくゝやゝと
ゆゝく。其時ゝ一ゝ業ゝ士ゝ其ゝ事ゝをゝ成ゝ。大ゝきゝなゝちゝうゝひゝくゝを急
ゝあゝやゝうゝとゝ行ゝき。ゆゝくゝひゝとゝもゝなゝくゝ。先ゝすゝべゝの年ゝ多
ゝうゝ。ゆゝやゝうゝまゝつゝらゝせゝ。ゝくゝてゝまゝよゝのゝよゝとゝひゝとゝつゝのゝもゝやゝ
ゝとゝ我ゝ行ゝひゝゑゝとゝいゝまゝて。相ゝ手ゝ行ゝ程ゝよゝまゝけゝくゝ。ゑゝをゝさゝし
ゝゆゝわゝ。彼ゝ老ゝ人ゝの佛ゝの行ゝうゝひゝやゝうゝとゝ。けゝちゝうゝの年ゝ代ゝ行ゝ。
ゝやゝしゝと用ゝ事ゝなゝき。ゝ行ゝ。ゝもゝ。ゝる遠ゝ日ゝをゝうゝけゝを。先ゝ行ゝ
ゝを。ゝ。ゝ。早ゝ迫ゝる。ゝ。ゝよゝ。ゝ漸ゝくゝ。ゝ。ゝ。

後世よりてとなへさきく。自分ハ聖賢のやうに
異ひなれとも其性を尽さうとの高きなる者
しも皆此人に備はるものなるべし

仁ハ心なり、いのち

わるい時例の人くさりひねくり傳習し学ばれる仁義の
位を及ぶ事ハ中より初まる人も天地の人と情
くらべて天地を万物を生ずるとのくらべとする故に
きと得くらべとすれハ人を人をするとくらの徳や
ずれも勿論なれとよくく仁ハ心之徳愛之理といふ
徳とあるハ仁義禮智諸もに行ふ者なるべき理

仁ハ古者ハ包括義も禮智も仁より出ずるなり。元ハ前
の講説ハ仁ハ心なり愛なり愛ハ人を
ずれ仁より初まるなり仁ハ衆善の長とする事多きも
知るべしやうなれとも人を多く意思と学一と
ずれとくく仁と衆善の長とするとくらべ情
ずれ意思の生きまと、こ、ハ今
仁と礼徳とすれとも、やうの一事ハ小儀きまわくハ
わるまくくい、いつまハ意思ハ礼徳
やうくく義も礼も智も仁ハ生ずるなり
わるくくと工夫すべき事わくハ行ずしとこ行を人今ハ

あるこそ少く前聞くには今ようやくすりもちのひなく
次へ行るさまは日に行ト為ると云きるもあるべ
とも行くべしくとも人の死にまれたる人の元氣おろかい
とし人の元氣を脉よりおそるきん此元氣をおもはら
とする脉ろかる氣絶ハ人死まれたるとくまもの
物をハ心死まれたる行ふ仕ると行ふ死へ内ちもとり合ふ
活物なるよりおもふ人よ情おもし物の氣とまるとく常よ
ある物そうし　ちとくハ父母をとくて自然と親をし親を
はさるよ君臣を君長をとくハ自然よ敬しる敬せる
よ君臣を尊徒をとくハ自然よ遜讓し遜讓せるよ君臣

次義を聞くハ必感すれをきを不義をゆくハ必恥ず
とをきるをし情ずく義をきるハ其人頑然として鬼
畜木石のごとく痛さ痒さをきるハ行とをく自然
し　ずるをもく恭敬せん義を聞く感すれをきずく不
義を聞くも恥れ率ずるをし　をとくいるよ仁義
礼智信情をもを徒ずして各其理をもるをきとも其本
源を仁ずるを人をして不仁ずを義も礼も智も其
さ源ずを其用ずをとをと　根肉ずを生せるハ真此徒
ずるを理公此理をずるを此理ずるを仁ずを人此徒といるをを
徒を、を仁ずを此理といるをを仁ずを理を、を仁ずを、を

家下の物ときそあつと考へ、其よ法くさく卒とのの
始終をそ必、相列の係れ幕下佐野の城と天徒寺豪
健の勇将なるべしとあるは琵琶法師と扮くこ事を藉
殺せく風々なれ、ちく俗らぬ先よ琵琶法師よりしるれ
其を多くあるまるれまるとき殺よそあれ其を侍
て俗ら必へとくた法師ら侍ひとく佐く本宮帝稜ら
浜川の先陣を俗ら殺よ天徒寺あるれ、ろて西宇と法る
さく今一出あれくあハきかるまるとき殺とく那次よ市
宗高ら扇の的と語ら殺れ、平家宇ら天徒寺まる義
浜數行よ及ら、後日よ家ハ崇よ出一月北平家ハら

きくけるとつく家ハとも、たおそく殺きまるくは俗我
答とも如とつを得ものくそ必、お後二出ともよ勇烈なる
るまるくあるをかれうるるすくもはるを。勇よる
は感涙よ咽ものくはくしたるくのまるくはを。今ら
不審するまよ、はきまるまあひひとくそ、天徒寺あと
流きくは今ら今ら各殺頼くるく異ひひら今北
一云まくさくくく力殺あるくくは先作ものの先陣よく
合点まくはくまを、頼朝舎弟北蒲冠者も賜くは寵
臣北梶原まと多まらくぬ生嘲と高綱よ賜ら多よあ殺を
やさまは其甲斐もるく。什馬まくを浜川と先陣北

者ハ人ハ先ヒたさきなれ必射死せしめ殺ひ
ゆきぬ頼朝よりと陸に寄せおけば其志を奪ふ
入ることなかれ我ぬ者ハ人ハ者ハ涙を拭ひ
ぬ又那須與市も大勝軍中を
撰ぶ者ハ只一騎陣頭に出て馬を海中に入て的
を射ること深手を負家鳴を聞て見れば
射損じなれば名誉と馬と
く腹を切て海に入むと覚悟しあるに我ありてこられ
ぬ武士の名誉なるなり其ハ毎に戦場に際て
ハ高綱宗高の名誉と同時に

あ人の人と異ひやすく為涙を多くさるべし者の多
名誉なるなるなるなるなるなるなるなる
名の武を尊ぶ多く一旦の勇氣ハ真實を
出ぬ者なるやと思ふ故に人に頼ることの
こそ人と云ふ者ハ諸兵法書悉く婢なるなるなる
天徒寺の武を尊ぶハ涙なるなるなるなる
と武の一筋ハ仁を根さして惻隠の心なる変なるなるなる
弱に武を救護なるなるなるなるなる
つるひなるなるなるなるなるなる
や其作なるなる武なるなるなる

文道も武道も内うと浦をして潤ひうるおして変するに
あらざるべからず。是則おのおのひとりの人なる物の
義をたしなむのみなり。すべからくもろもろの言行ともに義理
を尚ぶべきなり。要するに天地造化の源をうけ
たまわりたる人倫の全きなり。仁者といえばおのおの
義をもんみきる

座中初めて仁をもって徳の理をもとくべ
きを聞く。仏教今形ちをもって仏教全徳をもって四性を包含
す。四性の中に初めて義をのべ義をもって仁義
義をもってゆえに義も仁なるべし。仁義切なるものとみるべし

序に義字の意をもとめ来たるべしとは翁、人を仁義
あるべし。天を陰陽あるべしとし、おのおのを易中に立天之道曰
陰與陽、立人之道曰仁與義といえり。さるに乾元は春を発し
四時を統すべしいまだかつてもって秋に粛殺するを変生
の功をなすをもあるべきや。人道もまたかくのごとし。仁の四者を包
含するゆえに一向に自覚すべしといえども義の裁
制なくんば生道を損じて仁も亡びぬべし。翁、ひとり
孔子の人を作るを義とし孔子きたりてやはり弟子も心之発る
之宜と行なわしめ孔子制作の事之真、事此
きたりてやはり弟子を教授きたりてわれもすべし孔子きたる

なる物なり。仁は心之德なり。義は事の理なり。禮は
德の文なり。これを三つに分て、義と禮とハ日用行素共
に、取典去就の間に含糊不斷のこゝろを存し、
こゝろ道理に通ずるを義と云ひ、学問して苟且
因循なるを、行に敏とあたるを、過を改るに吝なるを遷
善速なるを、又内の事を修するを、行て有行
なるを、仁きをわる我下地とすれば、孔子も君子の行を
編し給ふ。義以為質とは、仁義の作ハ天地の文理を編し給ふ
敬以直内、義以方外とは、又周達を編し給ふ。質直
好義とは、義の簡要なるを、

あ〻人の仁害を生じ、仁義の仇となるなり。私欲
わるの故に邪智に傳き、外物に引まく、糸の仁性わり衰
と云ふ。すなわち我なる物も忽に消滅して、志なく、人欲日に盛なるそう。
ねも民天地のかゝるひあるべし。人欲の害ハ、喬木を枯
槁に同じ、生氣絶ぬれハ、喬木を枯
かゝる。孝子ゆるせども、純なるに行に義を
去ざるの腐ぬれハ利刀も頑鈍に同じ。仁義ハ義と
一時に行ひ、孝ハ行ひ、ねの物なるそのあの故に孔門の学仁
とのみ教へ給ふ。義を教へ給ふハ、

顔子にとへるに孔子克己復礼をもつて義とし礼は天理の節文人事の儀則とあまねく物に接する所にして私を除き枯なり一日克己復礼を修し礼に帰する事あらば天下仁に帰すとあり但顔子ならずして天理人欲の分よく判然として能なきこの如くに進修の用と同じくして其体の学若し念慮行事共に人欲の分を真り知ることあるに天理人欲の分を真り知ることなくして私を務むるときは徒らに孔門の教を惑乱し大学に致知と誠意を正心と先んじ克己復礼と云ふことを忘れ仁義を求めんとす

仁義を求るの理なり易に聖人の德を論して知崇礼卑とあり知崇は天なり礼卑は地なり知は崇くして礼は卑しくして天地の位成り成始成終の道なり故に撲渠の張夫子知礼を説き教を立て礼は禮成性の説なりとされども撲渠は限らざるべし濂洛関閩の学は格物を先きとし礼を説き持敬を主とし礼を説き学者高明を主とし

浩然の氣

第幼おのれ世を捨てやがて川入りせんとみずから仁義禮智を説くも何ぞ仕道成難しかと云へる哉今は何ぞ了後さしあたり学者も学

へ孝ゝ。け一云々不思議ようひわ〳〵孝ゝ。名云云も
いつく〳〵。さ〳〵仁義礼智ハ。浩然の氣ハ大切なる中ゝ。仁ゝ濃く
義の大切なるまゝハ。孟子浩然の氣ハ。よく〳〵考る。浩
然ゝ氣ハ。天地の間ゝ塞るといふ。ようこゝろ
ゝ。各考く見給へ。孟子ハ。盛大なる地ゝ。いのちハ
義ゝ生ずるゆゑ。いふ。ゆゑ。わたくしの正氣を惜く。と
浩然ゝ。地中ゝ。ゆゑ。私欲ハ〳〵。ゆゑ。きゝ。なるまゝ。
ゆゑ。其氣ゝ。ゆゑ。なるゝ。ちゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
浩然の氣ゝ。ゆゑ。きゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
なき人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

きハ機嫌ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

然るに中も動く氣に心のきざしを動かすといふ事
よく體認すべきなり。中庸に二人わが拙
を問ふ。拂曉よりぬくまでかつてこれなし。同
く起るなり。ひとりこれを痛くおくるるものなり。
八十九歳まで世間速やかにおくれ。其故を問ふ。稟賦
の強弱によるなり。されどもその速やかなる者も上方
酒氣わきたつがごとく氣中に心のきざしを動かすの力強とす。
もつとも浩然の氣も義を生じて其生ずる氣の又
義を助くるなり。いとく奇妙なり。孟子韓文公のごとく
其雜伝の中に神話のごとくいとね。ねもつて霊異

なるものなり。氣を噓く雲を生じ又ひとつの雲を常
用月に落り陵谷を泊くして生じてまた落の
変化をなすごとくなり。今浩然の氣をかくのごとく生じ
て又ひとつの氣を助くるなり。たとへば一理なり。もつとも
氣力をもつてひくがごとき強きとす。むかしの盈とするは
いとも助長なり。宋人の苗を抜く長すれの類なり
すべし氣自然の生路を妨げ。大きに集義の害を貽す
なり。多くの物化為もなく集義をもつてすべし。豪傑
必有事焉ありとは人なのかとさしなり。緊要の中
おもふに朝夕をもつてすべし。ねもつてのごとく

集義すれば必定一事わすれず必字最力あり人皆一定する所なり志のうすきおよそ世間人高ぶり助長せざれば忘る勿忘勿助長とは助長せざるとすれば忘れし助長せざるとすれば人皆さまざまあり先儒ときく持敬の法を論ずれば敬もまたうつる同うつるとは敬は徽絃中にて中のうつるとは敬は徽絃中にて中のうつるとは敬は執泥きく心を主とし尚定すれば他病をまして学の害忘るるあり朝鮮の李晦齋のいひやうにはよくは鶏卵のをはるごとし

勿忘は忘るるなり勿助は長は力を用ひて握定めねばなり握定めねば捉て潰て存心集義二致して体認きく敬は法を主とし持敬養氣二法あり両ツ共に要深切なり学者一場の伝話ときく作工夫

敬は工夫

庭中の敬字は敬義の義なり程朱は最詳明親切なり

敬は工夫は学者一生のことなり敬は工夫は学者一生のことなり

とくに角の異なるとき多くは敬は工夫なり

とくに角の異なるとき多くは敬は工夫なり

まハ結局に但行茶丹伝わるく反復切要なるなれ。吾
業に學者ゆく〳〵れ迷く〳〵ゆ〳〵むかう〳〵なるなれ。
反く初茶れ〳〵ゆ〳〵しうのまう〳〵学く学徒を。翁ハ多常
人のんよあて。治術よりさけ〳〵ゆ〳〵れ。敬を〳〵れ丹むきを
を出ゆ〳〵て。つ〳〵ゆうねや〳〵よ〳〵んれもゆ〳〵城多〳〵ゆて。赤
のちらねやう〳〵に。ゆのゆ人とゆ〳〵れ多〳〵ゆて。ま丹月けけて
ゆ〳〵れやう〳〵よ。学ゆく敬を〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵翁う流。
ゆ〳〵く浅きやう〳〵よ〳〵ゆ。浅しく反く〳〵ゆく〳〵ゆ〳〵やきやう
よゆ〳〵ゆ。易しく反く〳〵翁。各学城ゆよ験て凡流〳〵。主
一毫適も常握く法もけゆよりさまゆ〳〵学流ゆ。ま彩

しきや程よゆ〳〵ゆ。天下よ学ゆ大切ゆく又学ゆ多ゆ〳〵流き
ゆ〳〵けんゆ〳〵ゆ孔子もお入学時莫知其御との流へ学ゆ
よ其学ゆ大切ゆる拙成粗略よ〳〵ゆ。学ゆ維持ゆよん安く
存知ゆ程よけ心放逸ゆよ学て諸悪も起学ゆ学ゆ
そう〳〵ゆ。ゆ学ハ敬ゆゆの大切ゆ〳〵ゆてゆなきゆゆゆ心
ゆく〳〵ゆ古人の執玉捧盈よゆ〳〵ゆ。学ゆ〳〵ゆ学ゆ学ゆ。今学
實ゆゆゆ。盤水の盈ゆ城捧けけ。ゆ〳〵ゆ城ゆゆ〳〵ゆ氣
ゆゆゆ〳〵ゆ〳〵ゆ。其〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ持敬ゆ〳〵ゆ
学。ゆ学ゆゆ〳〵ゆ〳〵ゆ学ゆ盈ゆ捧学けけ〳〵ゆ〳〵ゆ執
ゆ〳〵捧けゆ学ゆ学ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ。

八法とは十法の神妙霊活なる也ゆゑに篇名むなし
く云為なく八方ともなるハ人に接するハまた
ちうしんなく志ゆく清ようのすれば所有此もとゝ
彼人移ゆくに人移ゆく水のたとへのごとく無根に根をきし
くとさまよひてとゝまるに麻のごとくうたゝ
荀子ハ元を偷心といひ釋氏ハたゝを流注想と名付く元
来人ある人ハ持病なり今翁の人ハむき我真空ゆく
ときゆうねやうにといふ元を療する主方とも成てい
ひとゝ人を人を屬する也なり人ハむきこゝろ所ぶれ
ひさき礼きく用るよりなへた黄勉齋のゝきまゝやうゝ

一炬の火のたとへ其本を焼くゝ夢くゝ火をとゝしてきゝ元
ゆゝしゝ所ゆゝ也をゆゝきゝをとゝなのけるゝ所ゆゝ
ゆゝ所ゆゝ人ゆゝ所ゆゝ人ゆゝ所ゆゝ人

い。其用ひやうハ如ようにく要子養氣の法よりかなるに。翁
かゝ。要子張よりたくおくらく。浩氣持敬とも。必有事
焉とよ云ヘ。もとやその理あるまかなるに。いうとなるに。
養氣持敬の此等ハ多くの事。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。面目
かなきハ。鳶のとび魚の躍おくるやうに。同じく提在の高遠なるを
とりて。ちかにそなへ。我離まとりて居るまくのまゝに。
寸の毫髮もかゝるまハかなる。ハ。考の深き忘るゝハ。その有事にのゝ
ち忘る。助長するゝハ。氣力を用ひくゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
他為もせず。其間ゝ自然の天機を自得ゝく。持敬の法とて
ゝ。若加賀よりあゝ。ゝ。ゝ。ゝ。翁持敬の

法をおしへて。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

ぼす事なり。義をかくして。共同し人も人ハ背徳なるなのみたとく。有感憐つゝ必ゆるゝ足えし。

民を主とし君を天

わるる時論語鄉黨篇の講注アリ。その式賀版者とわらく

ばるゝ。翁備客を對して王者以民爲天民以食爲天山の

意いうん若しゝ足ゝとしハ。在中ゝ。民ハ主ゝ邦のなり

ア。民為主ハ邦なし。民殺ハ邦亡ゝ。邦の存亡ゝ民よわ。

故ゝ君ゝ常ゝ民を尊て天とし。食ハ民ゝ命なゝ食を得

ハ民ハ。食を失ハ民死ゝ。民ハ死ゝ食よわ。故ゝ民食

をゝ天とし。とゝ。ゝ為わるゝ。翁さやゝよときゆゝハ。

とゝ。ゝ為ゝ。ゝ。ゝ。

よくしてかつてやし耕作と粗略ゆすくうるがそれ俗の本治
亂に係るなるべく今其の情を作るもむうこの代の時にな
民もとくに天とすれつつあるなり租税を落し山歌を極ひ困
厄流離せるまなすくうるむようて郡縣の民土著して安し
農業をもてるわ米穀をもちいて君よりて奉ゝ食をもてて天と
せるこれなうこれ其風あるけるゝ市肆も稀なるこれ士大夫を
くるめ商賈等よりて天根勤倹をして華奢をいまわ遊惰
の俗あるまもきうこれ暴秦よりて民を天とするもんなすこれ
往ゆ頭會箕斂民ゆ虐取をくやまもうこれくこれ郡國離
叛き四方土地やくくに崩壊てくう天下乱民間ゆ起こそう炎

漢起てくに天下泰平安事ゆなるやくかくも逐末射利乃後
四ゆ志ゆくく富商大賈封侯ゆひくそ食貨の柄を恣ゆせて
こ村閭の民もそもそ化して豪奢ゆなるいを游俠を幸これ賈
誼治安の疏を見くもるくしゆまもくゆ民を天とするもんなる
弊ゆて志ゆくくゆ作ゆくしたくゆ農ゆて天下ゆ本ゆくくゆ勤國
ゆ告諭ゆ租税免ゆ復を賜ひ郡吏ゆ貪欲をいまわ其上
孝弟力田ゆくくゆ下ゆ孝率ひゆ勝くゆ志ゆ崇ひ末を抑
まくくはゆくく漢史ゆ見ゆるゆくくゆ其ゆ文景の時君臣
恭倹ゆて隆厚を致せるまこ三代ゆ後ゆ治世もゆ角ゆ
そゆよりそゆ考ゆよ上代を格別ゆくゆ後世ゆ

知くして、郡縣の風市朝より移るやうに、市朝の風郡縣より移るハ
あるいハ其かたの市朝の風を奢侈を貴び、郡縣の風を樸素を
尚ぶなどの如くなるなり。市朝ハ富貴

家賛いよ〳〵多し次貨殖の家も貴き金銀をとて、やゝ
き米穀を買ひ置て家賛いよ〳〵除てもあるもの有数の
金銀をとゝ〳〵無限の驕奢きわ有用の金銀をとて無用の
物に費しやすく金銀日に虚耗して、おのゝ〳〵民間に流行
せんとして粒米狼戾きわめて價廉なる事も周里に
貧民ハそもゝ〳〵なさくもとむる力なきれハ富民ハ常に膏粱
に厭ともかゝるに引て菜色わるゝ人あり富民も常に肥丸に
飽ともかゝるに引て餓死する人あり中に悪性なる者ハ自ら死
を救んとて八法禁をも犯し盗賊をもすることゝ
なり世の困窮なるに引て此ハ俗に驕

奢に引て起りたる一名代々に引て代々とさしたる七十年
以前の人ハ世に今に引も粒繁華なるこゝもとに引て驕奢に
なれ俗に引てすゝ候事を聞に人も多くあるべきそ
と云ふ事に引て其比ハ代々に引て老わるゝ間に引てこゝ
其父祖に引て一生時に引て屋敷華野に起作して汗馬野戦に
まかり出る時に華奢風流の事ハ愛する事に其子孫も家風に
なりて今に引て世倉風なるこゝもあり世に引て質素
わるゝに引て虚なるしく家に引て甲斐なく頼
くもつもまゝ色うる情わるゝ人ハ世に引てやう〳〵
在朝の士大夫世俗に流し泰平なるすゝきまを志ハ

宴安とのゝ情く其鴆毒なるをしらず諂奏淫佞なる
ものもあやしむよりあらず。まゝ貨殖に家遊俠の徒を誦する
ものなりとしるべきに其弊郡縣中に移るとゝ今とゝも四海
よりさるの古風のたゝるゝ市朝ともに相ともなりて
民やあらゝまして麁暴なるまゝに大惡をなす人もあり。又も
一藥あゝ分別なのさ行ふ。絶俗に陽くハ已に怒よりあるよりた
てあるまゝもあまりに大やう市朝の人に郡縣をして人をた
ゝるはやうにすまゝなき行ふるにあらずして方もあるて。
惠を感じやすく行はれるもすくやうなるに已にあるとゝ
あるよりあまゝらゝあるにまゝをとるまゝ行ふ。郡長たる

人民を天とするにあるを忘まゝに常に豊凶をとゝうにく賦稅
をとゝ下し。飢寒に患ゝるゝ。父母に告ゝ妻子を言ゝるやう
に相討ゝるに民業怠ゝなゝ流離に愁なるゝ。
さるゝあゝ條法を設けゝ威刑をまゝ遊惰をまゝ治奏
を禁ゝなに。一郡感服をゝなに俗となるに。郡
縣一統にあるにまゝなに其に郡縣に比せに。
今市朝にあらゝに人數繁ゝとゝるゝ。天下に郡縣に比せに。
十分に一にもあらゝるに。市朝に盛なるに郡縣
も移ゝ。況や四方に郡縣谷安諸をゝ阜厚になるに。
其に天下に移ゝ。樸實に華靡に減ゝなんをゝに

驕奢兵凶やゝ衰て候事ハ後世ゆゝしき例なるべし。

富士山すそ野

多くの民を邦土乖離し郡縣の民憔悴流離して天下の勢もおとろへ落ぬ。

古今民窮して乱と云ハ郡縣危く国も危し。郡縣安き時ハ国も安し。されど郡縣を治乱のうるおとしたる事ハ

そもゝ世俗つゝしみ慎むべし。

憲廟の御時おゝ古人の好学あり。其人按察使を命ぜられ

畿内の郡縣を巡り前途より帰京の時ハ贈言

とゝ。其所に多く通中おく富士山すそ野を巡り給ひ

その山ハ高く極りなき山にして行のたゝずまひ

多くの石ゝ重なりて山ハ高く土下りて下の埆厚なり

わくるやうに拡がり上ハ狭く下ハ大きくして下

小さく忽ち崩れ落ちて山形を為さず多く下を原

すべやうなれども山ハ高き事ハ山形と云へ

元易の別卦の坤ハ地なり。別卦と長ハ山

卦ハ地坤ハ地なり。地ハ山なる象なり。山ハ

くゝ地に住ませ給ふ地に附くゝ地ハ基

とすべきなり。人の上なる人ハ別為して下を厚くすべし。邦

安くゝ山ハ地なり安置するゝ。地別為ゝ上

よまの世ハ山在地上の象なれども危うき事なり
其ゆへ付く術の悪事なく考ひなく只今市井の類の後多く
府下より所々国の害となり侍る第一人家に火をたくなく
大害成ル所ハ大方ハ郡県流浪して郡県困窮して流離
し及ぶ所無なきまでなり府下にも多く生
活すべきやうなく又故里へ帰るとても活方なく盗賊となり
命をたすけ申すなり郡県困窮せば父兄親族著
してわらハ家をもつて取出せば出せば出せの格別
なれば其外ハ多くハ府下へ出て故里
へ帰るべし外のことなわるは眼前極刑に陥るべきなり

外をすべて悪事をいたすなり又諸国より
追放せられ流浪するもの郡県賑ひ
多くなるべし
とく府下に集まるべし其郡県やゆたかなるを
中さ作ゆくハ府下へ盗賊やこうつまりくれ
事発るなり風俗ハ貴族厚禄の家より
やうのものなるべく下人を抱るに男の異形
に似るをえらびなんわるく
さやうなるハ世を渡るとも宅内の側
わけ者なるべく作酒博奕
酔外なるべくハ失火を

ものなり故に其人最悪性なるものは貧をぬすむ義をのがれ
ずして人をうらむるなり人の宅をかすめ人をたぶらかすもあり
結局人多の者のを得ずして起るなり畢竟華美
とものむ共流弊なるなり市朝の奢侈を抑へ郡県の困窮
を賑さんとするなり

天下共寶

さきに太平而多年の後人心奢侈に流れ今
奢侈を抑へ倹素を崇んとすれば貴倹廉直士を撰んで官に
当むるなり号令科條の及べきなれば次第五倫にあらざるや
以身教者従以言教者訟官長刑罰畏慎て

のたまうなり官長刑罰畏慎て教と云と其
下令行なはれ服せざる法令属下まとまりなるとく
治まるなり官長その人なれば法
改令を厚くせんとすれば法令を厚くせんとすれば
虐政となる孔子も為政在人其人存則政挙其人亡則
政息との為人者前者ある故人の家を論して二典の文を論せり
厳教のまもり及べき為人の歴の法炮て虞書を見るべし
後世を除くえなく粗なるなり法令の如きは法令の
なり義和の命なく候せしむ
やさしくなり天運動の如きなり運動の人として候せし

きくとき、其きちの色微なるをそなへ、腐法を一定の格に拘ず、廣はよのことゆゑ神く人の目力をとく審にせざれば、聖人教天地人なるお弘きをつゝしみ、風俗をよく察して、ゆく感服しき、天度八萬古不易なく、遅速盈縮常あるは地理をきわめ、動物なるを、定法の及ばざるおわるをこゝろ、況や人人変動常なく、そは互に及ばず情偽分ひ、法一定の格にあてはめ、あるなる材八取べきとも、嗇夫の利口を張欺之ものを黜け、贓八罪を免ずべきとも、掾吏の自首八呉祐なるを変じ、麗を放たずして託國の仁をとゝ、卵を盗むとも干城の将をすゝめ、子孫弘う布被八倹に似く、矯情の姦をたゝく、郭子儀の大志欲八奏に似て汚行の譏を貽さず、一定の格に泥んで、萬変の事を割ずんゝなるに、桂に膠ずく琴を鼓し、舟に刻く剣を求るなり、いとく変に応ひ宜きに、かなるべきを、其人を得てはを人に、神く行くもと、操縱進退時に応じ、よりて変通する術に、はを用てはに用ゆ、次は華を飾ては華に飾せ、さやうの人多く官に応ずるに任せば、國政なる事に洗ふ、ものあるべし、行ふ事無く治平なるべし、さて天下の寶なるべき材を選ぶ地あるべき、その故に楚八白珩を寶とせず、賢を寶とすべし、孫圉ひしまず、楚語に見へ、梁惠王吾國に徑寸の珠あるべく、

車ぬ寺後十二来と照さとくく齊の威さよ淆らき志の八威さ
寔人四臣わ〻てゑ里と照さゆて十二来のくゆの所んやと、くき
志中さ恵さも慚る色わすくしすて地さ寸ゆくゆも必さ
さすくくさくさ感くしなる八
東照宮ゆ仰ますなく、わる時一役人爾多るまわ〻くよゆ
老臣よゆくと代すく作ゆくゆ多へきすく思くゆ其人くくい
なるゆと汝多るわ臣よ其人さわくくゆくくゆくくくよ八
いくやくゆ人物さくゆ存知くゆねくくれくくゆ世代紀色く
そすて麾下の多き諸士とのくくゆ其人くくさくくいくくゆ
誤なゆ又々汝法士の若悪と必くくも志へき職さもわ所ぬよ

同て志へねとくゆ八ゆくゆ仲のくの八麾下人多
き中さも月ゆ孫もなくくよ志へくく人よ志へきねゆの外さ
わ所ゆくくさよ汝さ第一彩ゆの若悪と見ゆ事へくゆ今ゆ
ゆくく多る時さくゆ少すゆを職とするくのゆくく、ゆきさ外て
も存知せゆくゆくくくくくゆくくくゆくくくくく

其の類は名物にはあらずとはいへども、てうれよりは世ちんと思ふべきなり。そもそもいにしへの名物もあれ国家の用よりは次なくてもまたねとのなり。為宝の中に寒とうしゝ人よりそめたれなり。いまは常くにくせのやうはいかゝなるまとし。そもそもよりのまゝにてこかきくつゝ唯今のやうなる過差をはすりおきうしなさて汝等うのとく出入まいれくるべき立身をもうまとおもふ。信古れんるをわしくなりて、摂家よりひ流よりせんさきは麾下の古恥を忘れ義をたちは国家の元氣なり。そもそも諸士のんきいなくなりてくく恥をたちに梟々曲直さくいてなとうよ

やうになりてゆきなれなのかまをすると高倫ゝて義をちらんなるうし。たゝうけくへの元氣をせく死するたくく国家の元氣養へくやうて敗亡よりもうきるへきよあらに。後世なるたくよんををなくく大切のまゝ元氣くくにと作おもはるゝ。霜の山作よりよりくく考らよ人材と宝寶とくくにて維を国の元氣とたくくまは誠に国家の急鑑宗廟の基なるくし。家勢の人をおよはれ自然に似たるもきうに古今よすくきさ際なるかりやまとうくし中よ老にをかたうくわにやとこうくよ及ぶを国れよ家宰あり歴代よ吏部あり常よ卿のよりよ居くあるよ人材と撰物に

己の職をもて士大夫閥閲の家も識の材と保任して朝廷に登進しもと奉ずと云ひて、さつわきやく後世に成りて古道日に衰へ、宰相もまた急務と世次常に人の賢否をもて心なきに選挙のたわるとて、治聞宏詞身言書判の事なるに、吏部なる人に才詮衡の職にあずかり、簿書功倉さへ当てまとのつかさとなりて、世代をくだりて、況やなほ多くの人に任ずるに、ものさるに、ものとさう次第なる人の数今日君相たるこの老たる人多きを忘怪諫動きくとの盛意に和順さる者わずかに治世以後人材輩出して政脩挙して文明

の風あるて、天下泰平の化に浴せざるはなし。況や東照宮の遺沢にあずかり、四海奉仕をおるべきなり。

風俗は政の田地

主うるに天下国家中に風俗ほどなるに大切なるはなし。君主の威は天のごとく、其為人は雷のごとく、なるべきなれども、世俗に大勢に成りて、やはり世の風俗に勝うるに、さる程に號令は所詮なるとも、一邊にたるやうなるもたなほ風俗に逆ふて、おのづから違ひかくなるに、まして逆ふて程に多く局面にそなはる風俗なるに、政は穀稼の

ことゝ、なるべし嘉穀の稔やすく、地ちゝ肥へおもしろくて
ゐたらぬことゝ、なるべし若政良ければとゝ、風俗そのつくれて
ハ行きわたり、穀稔のそこなんやすを欲せば、地ちゝ肥へずちよを
くハへて、政今の行なきを欲せば、風俗をそのちよをくハ
へて、さきハ風俗のもとゝ人君民分よわく、人君ちゝ人分を
おさへて下位化をとゝ、古今不易の道なり、人君の分お
さまりたるゝ、ちゝ人のもとゝ用ゐすくきちつきゝ古よ
若過ることゝ、なくゝ強ものアて、世代風俗とわりて急ハ改まら
ぬあるべし、中ハ過ハ移ちハ弊きゝ移ちハ今
風俗をゝ、なくハ多くわしきのゝ、好つぬやゝ、よしやきた

もたるよあるゝ、ものゝ風俗を維持すといふ、ものゝ風俗を維持を
ものゝ、君一人の力ものゝ及ぶ、時ハ執柄をゝ、ものゝ
位長をして、天下のよるものゝ人名ものゝ人ものゝ
分をおさめ、ものゝ慎ぶ人のものゝ手ものゝ
下ものゝ人おのゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ
今もさく、ものき行ハ風俗をゝ改ものゝ、今代代
よるものゝ俗ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ
天下のものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ
ハ聲ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ
来くの流俗ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ

上の御盛德ハ爾ばかりなるに物ねやのうちぬ者よりさく常に作きまう
まかりまいりまつり歷〻諸役人〻にて爲きう
上の御方をとりけるに人ある人〻きさてて名ばかりあるよう
なきやうに〻なく無くなりぬる時ハ作りまいらせ〻あるをやわ
ばんの方治寛文のころ世に鶉くやうて貴富の家
たかく手まよきを鶉と購ひとりかへりて狂ひ其價をさかりとして徧遺
けり阿部豐後守忠秋も其こゝろ鶉をすきまして常に鶉を
左側に置てなぐさめてきうきをかるに列侯なる人き
き〻其こゝろ世にうつれかなき鶉を厚價をもとめて
召寵をとゝくちうきこゝろ鶉をもとめはしき鶉をもとめて

れ御殿に進〻ぬきはとい〻せきをよりその官醫豐州もも
とゝ其〻其方を達〻て御めしひらきさそよりこれをく
わるゝ〻をとゝ〻をハ豐州きうまく出〻よくやとゝ〻とこの
ひとりをかくのごとくわるゝてとりのとゝ出ぬ
時〻鶉鶉のにとゝなをかるくもけよりわるゝ行よりをわく
もけ行きハ其にとのうなかくわるゝ者よりとある行よ皆わけ行きハ
鶉鶉ゝを鶉をとゝ〻をとゝ〻ぬうの友醫ひとゝ〻ふ實よりなれ
久〻にれを別〻出ぬ又豐ひとゝ〻ハ豐州〻やさ
わゝ〻ハ今日よりまめゝハ紋ちれまく行るさて序なら
ぬ中に其と義 上御御威光中〻人よ執〻おもとる分よ

てあるすまいきやく作る。某さの工作場と鶏をすきゆへハ。
そやさやうにきこゆれ人とおはつ〳〵公家を始めと務すき成
やわ作りと、さ迷ふハかの皮鞨もをあるゝ〳〵とそ。ゆの教
寄多るまいそやわて〳〵人の志とく多間く作るあそしらひ
くもさてわるくきと上の所為を忘ぬよ上て。ゆ初のまゝ。
世の風俗も移りゆ。持威やもなるやうのまゝそうこに
ちゆゝ行よかくあるけ上。其ハ何〳〵作執技の所ハ作主も
作ゆ分よ譬めく格よハちらハなるまもあ所や寄よ法せ
らまゝ行よ其風ゆ移りゆく。事の役人よても廉潔質也
なる人あるて風俗を維持せ〳〵そ上じまゝ寄あるまゝ

俗の上ゆ上く移りゆさるまゝ。又下ゆ上も移りゆく
あるくあるくハゆゆ上移るハあの源すめ上下流すゝ源
濁ゆ上下流ゆるのゆるく。下よゆ上へ移りゆ下流泥塞ゆ
上ハ其泥を上へ推のゆせく。漸く上流よゆようとく。今
富商大賈の子弟武人俗吏の悪堂ゆ市井を頼の徒
日夜娼家戯場をとく家とく。酒食情愛をもくまとゆ其
風上へ移りゆく。列侯那ちの分ゆく。初そうよ娼家ゆ格を好む
もあゆ。士大夫といゆく分ゆく。きゆく戯場のゆを学ゆも
あゆ。是ゆ下よゆ上へ移りゆよあるすや。今世流俗を云さんと
なのゝいゆよ上よゆの官長とゆ法ゆ法ゆとゆく

よりてのまゝ、又ゝまゝある毒盡を捜扶ちて、下流の泥戎
海ゆへ、走うて今此国の賊民ども、同じく府廳へ訴を
き行ふとも、完結する事わずして、宜へ訴ゆんすして
も大のゝ事なれ、掠、礼義を忘れ、あるのは府廳の時
なれば、王ゝ〳〵ていまの子細をくゝく陸する事わ、
ゝ事よ下吏、さゝの推怒のゝ〳〵威勢と募る行ふ
ゝも公個法なる事わ、八歳譴せ〳〵を一云ゝ
口と相違すれ事わ、結同せゝ〳〵よゝく家ゝ子分
の部あゝくも府廳へ行ふとゝゝ〳〵雑事とゝの上府
廳八多〳〵一ゝ事、雳代作ゝ日〳〵よかゝのゝ山のゝ〳〵

事〳〵多、おゝゝのゝ〳〵多ゝゝ行きまゝ、帰ゝ〳〵
多くの日ゝを行る行ふ事ゝ比隣什伍相典よゝ多ゝ
廳へ行ふ、一周代ゝ〳〵ひとゝの、費用ゝの法
あゝゝ事よゝ大ゝ〳〵八下ゝ公高ゝ法ゝとゝ
次ゝ〳〵八姦賊悪業、ゝ〳〵国ゝ多ゝ、不法府廳ゝ
ゝ〳〵又ゝ行ふ事多ゝ、ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
悪と浸沿せんゝ〳〵八方〳〵ゝ小廳ゝ〳〵、国周と没
け、人と擇〳〵長ゝ〳〵、ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
と宮ゝ、ゝ〳〵府廳ゝ属せ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
歳ゝ、比隣ゝ〳〵相ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

山根力〜て人のをと男女衆目よわゝれ行の悪わる者を見
るとゝ共人國家の法を枉のゝをまゝなるゝともすゝやのよそゝの
ゝ者は監司是者をゝれやうゝ其場ゝ金波のゝ行
科なゝハ南奉ゝ法ゝ科なゝハ禁獄もいゝゝ世亞て
金波の弦と委ゝ具ゝ府下の人家なゝる
て聽ゝの處決を作ゝ多ゝ者のゝ府廳ゝ遣ゝ
ゝくも官ゝ達するゝ府廳ゝ多ゝの方なゝ府廳も小廳の成
獄と更ゝ聽乃せハ日ゝ應對簡易ゝて下ゝを新るゝも
壅滯ゝ成の患なゝるゝ
曲のゝるゝ隠ゝくきやゝなゝ人ゝ庸行をゝ者ゝ者ゝ

急ゝ感服するゝもゝなゝ面革ゝハ動ゝなゝんゝ乃ゝして
時月を經なゝ風俗も漸ゝ改ゝぬゝ人ゝ官ゝ多ゝ人ゝ
た空ゝを生ゝ始息を安ん人ゝ其下を治ゝゝ法をさゝ
さゝ法ゝ是ゝ新ゝきゝの人ゝゝゝゝゝ人ゝ風
俗の改ゝ新ゝ色ゝ新ゝなゝゝ人ゝ一世の料簡ゝ
ゝゝ其ゝ風俗ゝ金議ゝ迂遠なゝやゝゝ用ゝ
為ゝ爲ゝ國政を妨ゝ古風ゝ敗ゝのゝ
ゝゝ腐儒迂闊の故態ゝ
杞國憂天の人ゝ

駿臺雜話卷二畢

島田藏書

鷲津氏